

◆ 写真立て



ダンボールを加工したり、ホームセンターで売っている写真立てを素材に、漂着物や砂を貼り付けて装飾します。

【準備物】

- ・写真立て
- ・木工用ボンド
- ・漂着物

◆ ランプシェード(電球のカサ)



ビーチグラスを貼り合わせて作ります。形や色、大きさなど決まりはありません。自身の思いのままに楽しみましょう。

グルーガンを使うと、接着がスムーズになります。

【準備物】

- ・ビーチグラス
- ・接着剤
- ・電球(LEDが安全です)

グルーガン・ホットボンド



ステイック状のビニールボンドを、グルーガンに挿入して、熱で溶かして押し出ししながら使用します。

電源が必要ですが、速乾性、汎用性に優れ、クラフトの際に便利です。

あつてはならない物も教材に 自然・環境学習のきっかけに



(13) ビーチコーミング

皆さん、ビーチ(Beach combing)という言葉をご存知ですか? 浜辺に落ちている漂着物を拾いながら、海の自然や文化を楽しむ遊びのことを指します。直訳すると、「海岸をくまなく探し遊ぶ」遊びです。もともと、歐米で盛んに実施されてきましたが、実は私たちにとても身近な遊びです。しかし、身近な活動にもつながっています。

さて、読者の中にも海岸清掃に参加する方は多いと思います。海岸の様子を思い出してみてください。海岸にはどんなものが流れ着いていましたか。

流木、陶器やガラス片、貝殻、ペットボトルに、プラスチックパイプなどなど。中には海外から流れ着くものもあります。集めて捨ててしまふだけなら、普通の海岸清掃ですが、一歩踏み出る楽しさも味わえるのです。

左上がビーチグラスを集めることで宝石箱をつくる楽しさも味わえる。

右側は、ビーチグラスを拾い、それをガラス瓶が波と砂にこすられて角が落り、擦りガラス状になつたもので、本来あつてはな

また、時間がかけられるなら、さまざまな形や色の貝殻や流木、ビーチグラスとは、捨てられたガラス瓶が波と砂にこすられて角が落り、擦りガラス状になつたもので、本来あつてはな

るのだろうと考え、意見を交換すれば、効果的に自然を学ぶことや守ることにつながります。ぜひやってみてください。

これらの漂着物を使って楽しめる工作の例を紹介します。活動のアレンジに挑戦してみてはいかがでしょうか。

(地域活動支援センター 馬場田 真二)

安心安全 MEMO

当協会は、中国新聞社が展開している『ちゅーピーメルマガ』のデイリーメールを通じて、安心・安全につながる情報を提供してきました。「安心・安全MEMO」では、これまでに配信した情報の中からいくつかをまとめてご紹介します。暮らしの中の豆知識として、お役立てください。

◆ 紅葉見物はノーマイカーで

紅葉の季節となりました。紅葉は、昼夜の温度差によって、紅葉の季節となりました。紅葉は、昼夜の温度差

送ってください。

◆ 食欲に影響する 食品の色

食品の色は、味覚だけでなく、食欲にも影響を及ぼすと言われています。一般的に赤や黄、オレンジなどの暖色系は食欲を増進させ、青や紫など寒色系は逆に減退させます。ことわざに「目は口ほどにものを言える」とありますが、食を考えると、「色は味ほどに見える」とも言えるかもしれません。食品の色を上手に活用し、おいしく、バランスの取れた食生活を送ってください。



◆ 虫歯と歯周病予防

虫歯や歯周病を放置する

ると、口の中だけでなく全

身の健康に影響します。歯の細菌が原因となる感染症、かみ合わせが悪いために起こる頭痛や肩こりなどを弱くなると、肥満につながりやすいとも言われています。最近では、歯周病は糖尿病の症状を悪化させたり、動脈硬化を進行させたりすることも分かっています。全身の健康を守るために、歯の定期検診や正しいブラッシング、規則正しい食習慣を心掛けましょう。



8月20日、音戸町の奥内湾で、海辺の教室が開催された。

この企画は、子どもたちに地元の自然について触れてもらうことをねらいに、平成18年度から実施している。今回は、音戸小学校・明徳小学校・波多見小学校の3つの小学校から76人の児童が参加した。

リピート率80%を超えて、子どもたちは毎年楽しんでいるようである。

開会式では、日附美化センターの原所長から「楽しく良い学びを得ましょう」と号令がかけられ、参加者は、軍手と火バサミ、ごみ袋を手に干潟の清掃を開始します。



40分で30種の生き物を採集

みんなで地元の環境を守る

⑪音戸地区公衛協

【海辺教室】

「力二のオススメの見分け方を知ったよ」「これって食べられるの?」などさまざまな声が飛び交っていた。

採集してきた生き物は、図鑑を片手に種類ごとに仕分け、それぞの班がどこで何を捕まえたのかを確認した。ここでも子どもたちからは、「同じ種類なのに、模様が違うよ」「それどこにいたの?」などさまざまな感想を聞くことができた。わずか40分足らずの採集時間にもかかわらず、30種を超える生き物が集められた。参加者は、砂場、泥場、岩場、水中、陸上など、それぞれの場所にたくさんの生き物がすみ分けていることを改めて実感した。

最後に、音戸地区公衛協の島本会長が「今日の体験を活かし、地元の海にどんな生き物が暮らしているのか、家族や友達に話し、みんなで環境を守っていくことにつなげほしい」とまとめ、盛況のうちに終了した。

(地域活動支援センター)